

自殺未遂をくり返す女子大学生の時間的展望テスト (TPT) 所見

著者	勝俣 暎史
雑誌名	熊本大学教育学部紀要 人文科学
巻	39
ページ	319-334
発行年	1990-09-30
その他の言語のタイトル	The Analysis of the Time Perspective Test Protocol in an Attempted Suicide
URL	http://hdl.handle.net/2298/951

自殺未遂をくり返す女子大学生の 時間的展望テスト（TPT）所見

勝 俣 暎 史

The Analysis of the Time Perspective Test Protocol in an Attempted Suicide

Teruchika KATSUMATA

(Received May 21, 1990)

The Time Perspective Test (TPT) developed by the author was administered to a female college student who had attempted suicide three times during the previous two months. She made two further unsuccessful suicide attempts within 18 days after the test. The results showed that she was exclusively present-oriented with an unpleasant affective tone. Her present condition was perceived as apparently unchangeable. The content categories for her responses were restricted to negative aspects in her personality traits and her social contacts. Her suicidal behaviors including suicide attempts were interpreted as unwillingness to carry her negative and unchangeable present condition, brought from the past, into the future.

Key words : time perspective, TPT, attempted suicide

問 題

BINSWANGER (1957) は、自殺したエレン・ウェスト (Ellen West) という女性の時間性について、現存在分析の立場から考察している。彼によると、エレン・ウェストの自殺は「自由意志による行為」であるとともに、また「必然的な事件」であり、彼女の現存在はその死にふさわしく成熟していたとしている。すなわち、彼女の現存在は、過去によってより多く支配され（過去の優勢）、空虚な単なる現在に封じ込められていた。そのために、現存在はその原本的な生の意味、すなわちつねに将来により規定されている実存的成熟を奪われていた。過去が現存在の上に「のしかかる」時には、それは現存在からすべての将来への見込みを奪い取ることを意味していた。彼女が「罫に捕えられている」「すべての出口は塞がれている」「泥沼のようになり、腐敗している」「牢獄に閉じ込められている」「墓穴の中に埋められている」とか「壁の中に閉じ込められている」等と絶えず訴えていたのは、彼女の現存在を意味していると述べている。BINSWANGER は、自殺的な人々は過去を解釈し直し、新しい見方でそれを見る能力あるいは新しい経験に照らして再評価する能力を欠いていると考えた。

BROCKOPP & LESTER (1970, 1971) は、自殺的な患者と非自殺的な患者を用いて、BINSWANGER の推測を経験的に確認しようと意図した。彼らの得た結果によると、自殺的な患者は、他の患者よりも現在指向的であった。また、YUFIT, BENZIES, FONTE & FAWCETT (1970) は、過去、現在および未来に関する質問26項目からなる半ば投影法的な形式の質問紙 (The Time Questionnaire) を作成

し、臨床群（うつ病患者および抑うつ傾向の強い分裂病患者）70名と対照群92名に実施し、自殺傾向のある患者の識別を試みた。その結果、TQは自殺意図ないし自殺的行動の認められた臨床群と対象群とを有意に識別するのに有効であった。その後 YUFIT & BENZIES（1973）は、26項目からなるTQを修正して、39項目からなるTQを作成した。それを577名（患者群248名、対照群329名）に実施した結果、TQが自殺危険性の高い患者と他の群（正常群、自殺的傾向をもたない精神病患者および自殺の危険性の低い患者）とを統計的に有意に区別するのに有効であった。特に、自殺危険性の高い患者は、未来展望に欠け、未来について詳述することができなかった。また、過去に対する過度のこだわりが認められた。しかも、それらは否定的なものであった。対照群の人々は、未来展望があり、さまざまな目標、希望および達成動機をもっており、過去に対しては、こだわりは少なく、積極的なかわり方をしているのが特徴的であった。

勝俣・上田（1974）は、2週間前に自殺企図（未遂）の認められるクライアント（21歳、男子、印刷工）に対してTP T（時間的展望テスト）を実施した結果を報告している。その結果、この事例では、反応数(R)は9項目であり極めて少なく、時間的定位(O)は、過去(Pa)1、現在(Pr)4および未来(F)4であり、未来反応も認められるが未来に対する不安が顕著（未来反応4項目中3項目）であり、未来に対する目標は認められなかった。日常生活は極めて不快な感情を伴い（不快指数は77.8%）、現在、積極的に打ち込めるものではなく、現在の仕事に熱中できない。反応内容(C)は、自己の否定的側面と、父母のいずれかの死に対する不安に制限されており、きわめて狭い（密度は希薄）。問題兆候としては、自分が精神病ではないかという不安、他人から精神病と思われるのではないかという心配、失業不安、両親のいずれかの近い将来における死の不安を含めて不安感や自己嫌悪の傾向が強く、しばしば自殺念慮をもっている。すでに、高校時代より数回の希死念慮をもち、自殺未遂経験（2カ月前）もある。睡眠薬も時々使用している。人間関係は孤独であり、一緒に悩みを話し合える対象は身近にはなかった。このクライアントは、3ヶ月後にも再び睡眠薬自殺を企図したが、自らセラピストに連絡をとり救助された。薬物の量は致命的なものではなかった。

勝俣（1974）は、さらに自殺威嚇（suicidal threat）の認められるクライアント（23歳、男子、境界例、精神病院入院中）のTP Tに関する事例的考察を試みている。その結果によると、①テスト実施への態度は協力的であり、反応数(R)は28項目が挙げられたが、テスト実施所要時間は1時間55分に及び、平均的な被験者の45分から60分を大幅に超えていたこと、②時間的定位(O)は現在指向型（92.9%）であり、不満や悩みを伴う不快感で占められている（不快反応指数は89.3%）こと、③未来への明確に区別された反応は欠如しており、漠然とした挽回欲求として示されていること。しかも、その充足の可能性は、他者の援助次第（他者が援助してくれるならば可能性があり、他者が援助してくれないならば可能性はないとされている）であること、④反応内容領域(CR)は3領域にわたるが、大半（85.7%）は自己の性格の否定的側面、精神症状（自殺念慮、自殺企図を含む）および身体症状を含む「自己領域」に関することであること、⑤他者とのコミュニケーションは残存しているが、特定の対象（非常勤の女性カウンセラーと非常勤の医師）に制限されていること、などが明らかにされた。

本報告は、対人接触の障害、情緒不安定、希死（自殺）念慮などを訴えて、自ら筆者のところに来談した大学3年生（女子、21歳）の第3回目の面接時に実施したTP T成績に基づいて彼女の自殺的行動（来談する前の2カ月間に3回の自殺未遂があり、たえず希死念慮をもつ）を時間的展望という視点に焦点を当てて考察しようとするものである。なお、彼女は、TP Tを実施して8日および18日後にもガス自殺および睡眠薬自殺を企図したが、いずれも致命的ではなかった。ただし、

18日後の企図はやや重篤であり、意識が回復したのは2日目であった。

方 法

TPT (時間的展望テスト) は、EASON ら (1973) が時間的展望の研究方法の一つとして開発した関心事例挙法に、ロールシャッハ・テストやTATの発想を参考にして、勝俣ら (1973) が改良を加えたものである。TPTは個別に実施されるが、実施に先立ち、「あなたが最近2週間 (半月) の間に考えたり、人に話したことを25あげてください」という趣旨の教示が与えられる。実施手続は、①反応段階 (関心事の列挙)、②質問段階 (反応に対する説明を求める)、③関心事 (反応内容) のコミュニケーション状況 (思考と伝達の区分、時期、伝達対象) の区分段階、④時間的定位分類段階 (過去、現在、未来の分類)、⑤評定段階 (感情調、重要度、未来の建設的可能性について、-2, -1, 0, +1, +2の5段階評定)、および⑥反応内容の分類段階 (MIMのコーディング・システムを適用) の6段階からなる。ただし、TPT実施段階としては、第1段階 (反応段階) に続いて第2段階 (質問段階) に移るが、第3段階 (関心事のコミュニケーション状況の区分段階)、第4段階 (時間的定位段階) および第5段階 (評定段階) は続けて実施されるので、3つのステップをもって実施されることになる。また、第6段階 (反応内容分類) はテスト終了後になされる。なお、TPTの結果は、次のような視点から分析・整理される (勝俣, 1974)。

1) 数量的分析

- (1) 反応数
- (2) 所要時間
- (3) 時間的定位 (指向性) の分類 (過去、現在、未来の比率および優位性)
- (4) 時間的定位と感情調 (感情傾向) の比率
- (5) 時間的定位と重要度の比率
- (6) 未来の時間的定位 (指向性) と未来の建設 (肯定) 的実現の可能性の評価比率
- (7) 反応内容の分類比率

2) 質的分析 (顕著な反応傾向の分析)

各時間的次元ごとに、重要度+2および感情度+2および-2の反応を抽出する。未来の時間的次元においては、未来の建設 (肯定) 的可能性の有無 (+, -) を加える。これによって被験者の時間的展望の肯定的側面と否定的側面とを把握することが可能である。

3) 基礎的解釈 (時間的展望の主要な側面についての解釈)

- (1) 反応数 (response): 最大25項目
- (2) 時間的定位ないし指向性 (temporal orientation): 過去、現在および未来の時間的次元のどの次元に関心をもっているか。
- (3) 時間的拡がり (extension): 過去および未来に関する反応 (関心事) の現在からの時間的範囲の長さ。
- (4) 感情的傾向ないし感情調 (affective tone): 反応 (関心事) に対する感情的意味あるいは感情の調子についての主観的評価。
- (5) 重要度 (importance): 自己 (分) にとっての反応の重要性の程度の主観的評価。
- (6) 未来の建設的可能性 (possibility): 反応内容が将来建設的に実現される主観的見込み。
- (7) 密度 (density): 時間的次元 (過去、現在、未来) に対する肯定的な反応 (目標など) の数お

よび肯定的な反応内容の領域の多様性。

(8) 一貫性 (coherence) および固執性 (adherence) : 未来のでき事についての組織化の程度 (一貫性) および過去および現在への執着の程度。

(9) 反応内容 (content analysis) : M I M コーディング・システムにより 8 領域に分類。

4) その他 (時間的展望以外の要素の分析)

(1) 反応の簡潔性と明確度 (conciseness and clearness) : 反応段階における反応様式の簡潔さと質問段階における説明の的確性。

(2) 対人関係ないしコミュニケーション (human relations and/or communication) : 反応内容の伝達率および対象。

5) 総合的解釈

上記の数量的分析, 質的分析およびそれらを踏まえて為される基礎的解釈を総合するとともに, 必要に応じて, 他の手段によって得られた資料 (生活史, 諸検査, 行動観察, 面接資料等) とを併せて考察する。

実施時期は 198 x 年 4 月末。実施場所は熊本大学教育学部心理学科面接室。テスト実施所要時間は 1 時間 47 分。

事例の概要

A 子 (国立 K 大学 3 年生) は 3 人きょうだいの末子 (兄は教員, 姉はある国立大学 4 年生) であり, 両親とも公立学校の教師という環境のなかで成育した。A 子は F 県内の公立高校卒業後, 現役で K 大学に入学した。高校時代から人間関係がうまくいかないことにうすうす気づいていたが, 大学に入れば変わるだろうと, 希望を託していた。1 年次は「明るい」と周囲の人から言われたこともあり, なんとか過ごしたが, 2 年次になってから次第にサークル (文化系) やある趣味の会 (大学外) における対人関係がスムーズにできなくなり, 悩むことが多くなった。幼稚さ (2, 3 の友人から指摘された) をなおすのに役立つだろうと期待してはじめたアルバイト先でも, 「人とのコミュニケーションができない」と注意され, かえって自信をなくす結果を招いた (11 月)。その頃から, 感情の起伏が一層激しくなり, 後期試験中 (2 月末) には, アパートの自室で睡眠薬による自殺を企図 (未遂) した。3 月になって, 帰省して間もなく, 母親とある寺の住職に相談したところ「皆はあなたをこわがっている・・・」などと指摘され, ショックを受け, 絶望的になったという。3 月末に, 家族の留守中に, 自宅の 2 階の階段の柱にベルトをかけて首吊り自殺を企図したが, 足が床についたために, 未遂であった。第 3 回目の自殺企図 (ガス使用) は, それから 2, 3 日後になされたが, たまたま帰宅した父親によって, 意識不明の状態で見えられ, 病院に収容され, 救助された。A 子が来談したのはそれからおよそ 1 カ月後 (4 月下旬) のことであった。

T P T プロトコル

T P T の反応は所定の記録用紙に記入されるが, 紙面の都合上, ここでは前述の 4 段階の手続によって得られた事柄を, 反応番号, 反応, (質問段階での説明), [考えた (○)], 話した (△) 時期・相手, 時間的位置ないし指向性 (orientation ; “O”), 感情調 (affective tone ; “Af”), 重要度 (im-

portance ; "I"), 未来の建設的可能性 (possibility ; "P"), 内容分類 (content ; "C") の順に示す。なお、<>内は検査者の観察事項および質問内容である。

反応1 「死にたい」ということ。(小学校の頃からずっと考えています。最近では後期試験の前頃から毎日「死んだほうがましだ」ということは考えています。……手段はいろいろ考えました。飛び降りか首吊りがいいでしょうけど、どっちも恐くてできません。そういう勇気があったら人にも話せると思います。……人とうまくしゃべれない。それと、こっちは苦しくなって……神経質を通り越して、相手の雰囲気なんかもわかってしまうんです。だから、消滅してしまいたい。この世から消え去りたい……) <声を震わせ、涙を浮かべながら話す>, [Ys (小6の頃から。最近では後期試験の頃から), ○ (半年前は話したが、この頃は考えるだけ), O=aPr-f (現在の状態であるが、過去からずっと。そして先も), Af = -2, I = +2, P = -2, C=n⁺Tx, 希死 (自殺・断絶) 念慮]

反応2 学校をやめて家にこもりたい。(父母には一緒に話して……母には何回もそれを話しました。……自分は変わりそうもなく、よくなりそうもない。人とうまく話せないような状態が続くと思うとぞっとして、自分の状況も変らなくて、まわりの状況も全然変らないとしたら、もう、いっそのこと逃げてしまって、家にこもった方が楽だし、きつくないから、楽だと思ったから……逃げですけど……自分を皆の前にさらすのは辛いと思ったからです), [M₁ (18日位前, 4月はじめ), △ (父, 母, 姉), O = Pr-f, Af = -1, I = +1, P = 0, C = n⁺C, 社会的接触回避の肯定]

反応3 一生家にこもって、仕事をせずに家族とだけ接していたい。外の仕事をせずに。(家でできる仕事はするかもしれませんが……逃避行ですけど……), [18日位前, △ (母), O = Pr-f, Af = -1, I = +1, P = 0, C = nCg, 社会的接触回避の肯定]

反応4 下宿は思ったよりも人間関係がきびしい。(おばちゃんが、少し、門限ぎりぎりに帰ってきた時、すごいやさしいおばちゃんと思っていた人が、少し恐いような感じになって、厳しい顔になってとか……おばちゃんべったりにもできないし、といってつんつんにもできないし、そういうのが難しい。……下宿生活というよりも人間関係につながって、一般の人間関係ということ。……それが下宿の生活というのはいつも人間と一緒にいるから。だから、下宿生活というふうになっただけです。私が考えた以上に、甘えてはいけなくて、きちんとした生活をしなくちゃいけないとか、気をつけなくてはいけなくて、沢山ある……), [M₁ (思ったのは春休み。2カ月位前。4月7日も思った。昨日も今日も思った), ○ (他の大学の友人には手紙に書いた), O = aPr-f, Af = -1, I = +1, P = -1, C = C (np), 対人接触の困難]

反応5 自分はきちんとした性格だったのに、日常の掃除や洗濯もしなくなり、だらけてきた。普通の女の子がすることをしていないと思いました。(この頃はきれいにするように気をつけているけれども、以前よりもだらしなくなったと言われる。母親に言われました。家で……), [M₆ (2年の後期頃からときどき思う。昨日も), ○, O = aPr, Af = -2, I = +2, C = Scar (np), 自己の性格特性の否定的表現]

反応6 自分は疲れ易いと思いました。すごく、町を歩いていても疲れ易い。緊張というか……歌をうたっていても、授業中でもときどきすることがある。(バレーボールを小学校、中学校の頃していたんですが、人よりも余計に疲れるんです。〈対人関係で疲れるの?、それとも身体的に?〉どっちもあると思います。〈どうして疲れるんですか?〉緊張もあるし、要領も悪いし……で、小学校の時も緊張していました。〈内気だった?〉やっぱり内気というか、打ち解けませんでした。クラス委員なんかやってみましたけど……リラックスする方法を知らない限り続くと思う), [Ys (いつ

も、中学校の頃から両親には話している。ずっと変っていない。今日も話した), Δ (父母, 友人, きょうだい), $O = aPr-f$, $Af = -2$, $I = +2$, $P = -1$, $C = Scar (C,np)$, 自己の性格特性の否定的表現 (対人接触面)]

反応7 思いがけない失敗とかしたときに, 皆の前でもものすごくどきどきして, なんか, 気違いになる位に自分でもびっくりする位にどきどきする。それに対する動揺がものすごく激しい。(昨日考えたけれども……, 高校の頃から, いや, 中学校の頃からです。昨日考えたのは教室に入って, 髪の毛の長い友だちがいて, その友だちの髪をきまっていると思ってつまんだら, 人違いで, そのクラスを間違えたと思って飛び出したけれども, 教室は間違いではなくて, 友だちが「ここでいい」と言って呼びに来て……, 皆がわっと気づいて, ものすごく恥かしくて, 先生がいらっしゃってもどきどきして, 自分はなんと感情の起伏が激しいんだろう……と思いました), $[Ys$ (中学の頃から。後期試験の前頃から。昨日も思った), O , $O = aPr-f$, $Af = -2$, $I = +2$, $P = -1$, $C = Scar (C,np)$, 自己の性格特性の否定的表現 (対人接触面)]

反応8 気分にもうがある。ものすごく機嫌がよかった次の何分か後には, すごく落込んだりとかなんか, もうがあるし……。 (くるくる……動揺が激しいというのと大体同じです。〈上と同じでいいんですか?〉後期試験の頃から思いました。立ちなおったと思ったら, 落込んで……, 落込んで……, 一昨日すごく落込んでいて, 昨日すごくなごやかになって……, すごいもうがある), $[M_6$ (後期試験の頃から, 時々, いつも思っています。今日も), O , $O = aPr-f$, $Af = -2$, $I = +2$, $P = -1$, $C = Scar (np)$, 自己の性格特性の否定的表現]

反応9 自分は人と話す時に, いつもカタカナ言葉しか話せなくて, 全然親しくなれない。親しい言葉で話せない。下宿のおばちゃんとでも, 友だちとでも……, 先輩にしても。……, 一人で硬くなっている。(一人だけで硬くなっている), $[M_1$ (18日前から), Δ (友人, 父母), $O = aPr-f$, $Af = -2$, $I = +2$, $P = -1$, $C = Scar (C,np)$, 自己の性格特性の否定的表現 (対人接触面)]

反応10 自分は手伝いとか, あまり, 高校時代まで, ずっとしたことがなくて, 自分で気をつけてもいないので, 気がきかないと思いました。(バイトに行ったりして, いっぺんに動いたり, 気を配ったりするのがむずかしいから……, 気がきかない), $[M_6$ (後期試験の前頃から。4日前も), Δ (友人のT子さん), $O = aPr$, $Af = -1$, $I = +1$, $C = Scar (R_3,np)$, 自己の性格特性の否定的表現 (副次的仕事上に見られる)]

反応11 自分は冗談とか言えなくて, 面白くない子だと思いました。(自信とかついたら……。でも, (将来も)今のままで続きそう), $[M_1$ (春休みに話した。高校の頃からそう思っている), Δ (姉), $O = aPr-f$, $Af = -2$, $I = +2$, $P = -1$, $C = Scar (C,np)$, 自己の性格特性の否定的表現 (対人接触面)]

反応12 自分の友だちは, なんか, すごく真面目で, ちょっと変っている子がいるんですけど, その子みたいな子と一生, なんか, どの場所においても, そういう子たちとしかつき合えないのかなと思いました。(少し変っていて, 気が弱くて, おとなしくて, どこにいても多分そういう人としつき合えないと思う), $[M_6$ (後期試験の前頃から。9月頃から, いや11月頃から。去年の), Δ (友人のT子さん), $O = aPr-f$, $Af = -2$, $I = +2$, $P = -1$, $C = Scar (C,np)$, 自己の性格特性についての否定的表現 (対人接触面)]

反応13 私が下宿に変った理由は, すごく, なんか, 本当に気違い寸前まで気持が乱れていて, それで, 対人関係とかでもよくよして, 下宿の人やクラスの人でもそれを知っている人が何人かいるから, そういう人から避けられているのかなとか, そういうような思いをしたことが何回もありました。私のことを知りすぎている人は, よく知っている人は……避けられている。(自分が

すごく気持ちが乱れていて、気が狂う位乱れていて、くよくよしていて、そういうふうなので下宿を変ったということを知っている人が何人かクラスにいるんですけど、そういう人から避けられているのがすごくよくわかりました), [M₁ (4月7日以降いつも, 毎日, 昨日も今日も), O = aPr, Af = -2, I = +2, C = C₂ (Scar, np), 他者からの人間関係 (自己の性格特性についての否定的表現)]

反応14 さっき友だちと一緒にいたんですけど, その時に, 私が事故に遭ったらすごく悲しむと言ったので, 私みたいな人間にそういうことを言うのはうれしいと思いました. あまりに意外ですごくうれしかったです. (バイクに乗っているから……, だからそういう話になって……, 「自分を悲しんでくれる人がいるんだな」って思いました. 意外でした), <時間の定位がなかなかできず, 混乱し, ぼーっとしている> [D (今日), ○, O = Pr, Af = +2, I = +1, C = C₂ (af), 他者からの好意的接触]

反応15 頭がふらふらして, このまま間違いになるのではないかと思ったこともありました. 考え過ぎて, 頭がふらふらして……このまま間違いになるのではないかと思いました. (考え過ぎて, 止まらなくて, 頭がぼーっとしてきて, 「白紙になれ」と下宿のおばちゃんたちに言われるんですけど, 全然できなくて, 自分で自分をコントロールできなくて…), [M₆ (後期試験の前頃からいつも), ○, O = aPr-f, Af = -2, I = +2, P = -1, C = Scar (np), 自己の性格特性についての否定的表現]

反応16 死ぬことは考えず, 生きることを肯定しようかと思ったこともありましたけど, いざ生きるっていうふうになったら, 今度はどうやって自分は生きたらよいか, 全然わからないと思いました. どうやって…生きたら…全く, 全然わかりません. 何を考えたらいいのか, 何をしたらいいのか…とか… (先ず, 人にコンパとかの席でどんな話をしたらいいかわからないし, なんか, とにかく, 自分はどんな職業についたらよいかもわからないし, どういう友だちとつき合ったらよいかもわからないし, どういうふうな気持ちでいたらよいかわからないし, 毎日, 男の人で, どういう人を好きになったらいいかわからないし, 自分で何も判断ができないし, 自分をどうコントロールしたらよいかもわからないし…, とにかく全部わからない), [M₁ (4月になってから. 4月10日と13日に父が来た), △ (父, 趣味の会の仲間のお姉さん), O = aPr-f, Af = -2, I = +2, P = -2, C = Tx(E), 生き方]

反応17 自分はつきつめて考えることが好きなんだと思いました. (つきつめて自分のことばかり考える. ほかに考えないで, くよくよ自分は陰気だとか, 自分は人と話せないとか, 自分は気が弱いとか, 自分は勇気がないとか, とにかくどうしたらよいかわからない. 自分は優柔不断だとか, 自分は受身的だとか……ぼーっと考えてしまう. 短歌につくりました), [M₁ (3月10日頃から, 春休みずっと. 毎日. 昨日も), ○, O = aPr-f, Af = -2, I = +2, P = -1, C = Scar (np) 自己の性格特性についての否定的表現]

反応18 父とか母とかは私の状態が本当によくはわかっていないで, とにかく大学を卒業させることばかり思っていると思いました. (4年間ずっと思い続けるのはつらい…), [M₁ (4月はじめからいつも), ○, O = Pr-f, Af = -2, I = +2, P = -1, C = C₂ (np), 他者からの無理解 (社会的接触の否定的表現)]

反応19 このままべったりおとなしい人とばかり付き合っているんじゃなくて, もっとなんかいろいろ積極的な人とも, というか普通の人とも話したりして, 自分を成長させなくてはいけないって, 昨日の夜思いました. (成長がないということです), [M₆ (後期試験の前頃話しました. 最近話してないけど, 毎日考えてます), △ (T子さん), O = aPr, Af = -2, I = +2, P = -

1, C=Scar (C, d, np), 自己の性格についての否定的表現 (他者との接触における依存性)]

反応20 おとなしくていつもくっついてる女の子がいるんですけど, すごく真面目のような, そういう子がいるんですけど, なんか……, その子のことをいつもいやだなと思います. 目つきとか, 見るたびに「いやだな」とか思って……思いながらも, 自分では他の友だちをつくれなから……, その子とずるずるしています. 「いやだな」とか思いながら……, (他人のことなんですけど, 自分の性格のことも半分あります. 自分が優柔不断だからそういう友だちがついてくるんだなと思うと, 自分の性格も腹が立ってきます. <自分の性格のことと友人のこととどっちに比重がありますか> 友だちのことです), [M₆ (後期試験の前. 1月か2月頃. 3カ月位前. 最近ではいつも思っている. 昨日も今日も), Δ (Y子ちゃんという子), O=aPr-f, Af=-1, I=+1, P=-1, C=nCfri (Scar, np), 友人との接触回避および自己の性格特性の否定的表現]

反応21 自分はなんか下宿で, 皆がなごやかにリラックスしているのに, 自分だけ「何を話そう, 何を話そう」とか思って, 一人で緊張しているなと思いました. [W₂ (4月12, 3日頃話した. いつも思う), Δ (父, おばちゃん, 友人), O=aPr-f, Af=-2, I=+2, P=-1, C=Scar (C, np), 自己の性格特性についての否定的表現 (他者との接触面)]

反応22 私がこんなにぐずぐず, くよくよしている間に, 皆がどんどん成長しているのかなと思って, すごくくやしいと思いました. (私がくやしい, 昨日手紙に書きました), [W₃ (後期試験の前頃から時々思う. 昨日も), O=aPr-f, Af=-2, I=+2, C=Scar (d, np), 自己の性格の否定的表現]

反応23 考えが次から次へと浮かんで, くよくよし出して, それを止める方法がわからないと思いました. 考えをやめる方法がわからないと思いました. (考え出して, これじゃいけないと思う時ときどき思う), [M₆ (後期試験の前頃から. 最近も時々思う. 一昨日も昨日も), Δ (下宿のお婆ちゃん), O=aPr-f, Af=-2, I=+2, P=-1, C=E (Scar, np), 探求・認知 (自己の性格特性についての否定的側面について)]

反応24 人前に出るのは緊張するし, なんか, 何も話せないし, 暗い表情をしているのかもしれないし, 人前に出たくないと思いました. (暗い表情で, 不快感を与える. そして, それが自分にはねかえって, 自分もまた不快になるし……, 何を話したらよいかわからないし, 皆が話しているのに自分だけだまっているのは苦しいし……), [W₂ (4月中旬に話した. ときどき思う. 昨日も), Δ (母), O=aPr-f, Af=-2, I=+2, P=-1, C=nC, g, 一般的対人接触の回避]

反応25 「皆は一体何を話しているのかな」と思いました. («どんなことを話せばよいんだろう」ということにつながります. 他人のことでなく, 結局自分のことです. ……中学2年生位から時々思っています……), [M₆ (後期試験の前頃), Δ (友人2人), O=aPr-f, Af=-2, I=+2, P=-1, C=E(C), 探求・認知 (人との接触について知りたい願望)]

結果の分析および考察

上記のTPTプロトコルに基づいて, A子の時間的展望の様態を(1)数量的分析, (2)質的分析および(3)総合的解釈を通して考察することにする.

1. 数量的分析

表1は, 反応段階, 質問段階, 関心事のコミュニケーション状況区分段階, 時間的定位 (指向

表 1 時間的次元別反応傾向の基礎的分類

[illegible]

性) 分類段階および評定段階で得られた資料を分類したものである。縦軸には過去・現在・未来の時間次元(時間的定位)が区分されている。それらのうち、未来(F; future)の次元は、さらに、当日の未来(D), 1週間以内の未来(W₁), 2週間以内の未来(W₂), 1カ月以内の未来(M₁), 6カ月以内の未来(M₆), 1年以内の未来(Y₁), 1年以上の未来(Y_s), および不明の8つに区分されている。未来の拡がり(extension)を区分としたものである。現在(P; present)の次元は4つに区分されている。Pr という記号は「今のこと」という感じで認知された「現在」(present)の略号である。aPr は、現在のことではあるが、過去から持続されており、過去と明確に区分することができない現在を意味している。実際の応答では「前からずっと」とか「10日位前からときどき。昨日も今日も…」という表現で示される。過去(past)と現在(present)とを結合した複合記号である。Pr-f という記号は、現在から未来(future)へと続くことを示す。「現在のことですが、これから先も続くと思います」というような表現で示された応答である。また、aPr-f は、過去から現在に続いてきたことであるが、漠然とではあるが未来とも関係があると感じられる反応を意味する記号である。過去(past)を示す記号として Pa を用いてあるが、過去の時間的拡がり(extension)の区分は、未来の次元において用いたものと同様である。また、横軸には感情傾向(調)(Af; affective tone), 重要度(I; importance), 未来の建設的可能性(P; possibility), 伝達の有無および初発思考時期が区分されている。それらのうち、感情調(Af), 重要度(I)および未来の建設的可能性(P)については、それぞれ-2から+2までの5段階の評定尺度が付されている。

表2は、表1から得られた時間的展望の重要な傾向をまとめたものである。表1および表2から得られた基礎的な傾向は以下の通りである。

- (1) 反応数(R): 47項目(25項目のみ分析)。
- (2) 所要時間(T): 1時間47分(25項目分)で長い(一般大学生の場合、平均45-60分)。
- (3) 時間的定位(O): 極度の現在指向型(100%)。そのうち aPr-f (過去から現在に続いてきたことであるが、漠然とではあるが未来とも関係があると感じられる反応)が18項目(72%), Pr-f

表2. 時間的展望の形式的分析

形式分析項目	概 要	形式分析項目	概 要
1. 反応数(R)	47項目(25項目のみ分析)	6. 建設的未来の可能性 (Possibility)	建設的未来の可能(0%) aPr-fとPr-fの現在反応の 関わる漠然とした未来中, -2=1, -1=18
2. 時間的定位 (Temporal orientation)	現在指向優位(100%) aPr-f=18, Pr-f=3, F=1	7. 密度 (Density)	各時間的次元に対する肯定的 な反応を欠き、密度は希 薄である。
3. 時間的拡がり (Extension)	純粹未来反応(F)および 純粹過去反応(Pa)なく、 漠然とした未来への不安多 し。拡がり不明。	8. 一貫性・固執性 (Coherence)(Adherece)	一貫性(未来のでき事につ いての組織化の程度)は算 出不能。否定的現在への固 執性が強い。
4. 感情調 (Affective tone)	不快指数(96.0%) A f (-2)=19, A f (-1)=5 24/25は不快	9. 反応の簡潔性と明確度 (Conciseness and clearness)	簡潔性を欠き(冗長), 明 細ではあるが不明確(混乱)。
5. 重要度 (Importance)	重要度指数(100%) I (+2)=19 I (+1)=6	10. 対人関係 (Human relations)	伝達率は56%。2週間以内 の対人関係は乏しい。家族 への依存傾向。

(現在のことであるが、未来とも関係がある反応) が3項目、aPr (過去から引き続いている現在反応) が3項目であり、純粋な現在指向 (Pr) は1反応のみである。A子の時間的定位は変化のない現在の持続にすぎない。

(4) 時間的広がり (Ex) : 時間を特定した過去反応も未来反応も皆無であり、未来は閉されている。A子の反応には小学生および中学生のころから持続した現在が、漠然と未来にも持続するとする反応が多い。

(5) 感情調 (Af) : 不快反応指数は96% (25項目中24項目) であり、反応のほとんどすべては不快な内容で占められている。なかでも、-2 (非常に不快) が19項目 (76.0%) であり、-1 (やや不快) が5項目 (20.0%) である。

(6) 重要度 (I) : 25項目すべて (100%) が「重要」とされており、そのうち+2 (非常に) が19項目 (76.0%) であり、+1 (やや) が6項目 (24.0%) である。

(7) 未来の建設的可能性 (P) : 時間を特定した未来反応は皆無であり、すべて (21項目) が現在反応に属する漠然とした未来である。それらが建設的に進行する可能性は極めて乏しい (-2 が1項目、-1 が18項目、0 が2項目)。21項目中19項目 (90.5%) が「可能性なし」の反応である。

(8) 密度 (D) : 時間的次元 (過去, 現在, 未来) に対する肯定的な反応の数および肯定的な反応内容の領域の多様性をもって密度をとらえた場合、A子の反応はすべて現在指向反応であり、しかも、4領域に及ぶ反応内容 (自己, 社会的接触, 探求・認知および超自然) はすべて否定的内容であることからして、密度は低いと言える。

(9) 固執性 (Ad) : 教示で与えられた「2週間以内に考えたり、話したこと」という時間枠を超えた反応が多いならば、肯定的であるか否定的であるかは別として、少なくとも2週間以上同じことに固執していることを意味すると言える。A子の場合には、25項目の反応のうち、初発思考時期が2週間の枠の中にあるのは3項目に過ぎず、22項目 (88.0%) は2週間の枠を超えている。13項目 (52.0%) は1カ月以上 (-M₆が40%, Y_sが12%) となっている。したがって、極めて固執性が強いと言える。

2. 質的分析

1) 反応内容の全体的分析

NUTTIN (1976) が開発したMIMコーディング・システム (8つの主要カテゴリーからなる) を採用して、A子のTPT反応を分類すると、次のような傾向が認められる (表3)。

(1) 25項目中、「自己」に関すること (S) および「社会的接触」に関すること (C) の2カテゴリーに21項目 (84.0%) が集中しており、「探求・認知」に関すること (E) および「超自然的」なこと (T) に各2項目 (8%) が点在しているだけである。それらのうち、「自己」に関することでは、13項目すべてが「自己の性格特性についての否定的表現, Scar (np)」の陳述であり、「社会的接触」に関することでは、8項目中7項目は他者との接触の回避ないし拒否 (n⁺C, nCfri, nCg), 接触困難 (C₂np) および他者からの無理解 (C₂np) に関することがらである。また、「超自然的」なこととして、「希死ないし自殺念慮, n⁺Tx」が認められる。

(2) 「自己実現」に関すること (SR), 自己実現以外の「実現」に関すること (R), 「余暇活動, 娯楽など」に関すること (L) および「所有, 獲得」に関すること (P) などについては、全く触れられていない。

2) 重要反応内容の分析

25項目の反応のうちで、被験者にとって最も重要な反応を識別するために作成されたのが表4で

表 3. 反応内容分類

反 応 領 域		過	現	未	計	反 応 領 域		過	現	未	計
# 1	S(自己一般—不特定)					# 5	E(知識欲, 探求心)		1		
S	Sc(自己知覚, 自己概念)					E	E(S)(自分自身について知		1		
	Spre(自己保存)						りたい願望)				
自	Saut(自己自律)				13	探	E(R ₂) or E(R ₂ E) (専門的活				2
	Scar (人格・性格特性)(np)		13			究	動ないし専門的研究につ				
己	Sapt(適性)					・	E(C, e)(特定の人をより理				8
	Spn(身体的・生理的側面)				52%	認	EI(人生経験を広げたい)				%
						知	E(w)(文化や自然について)				
							E(T)(超自然的なものにつ				
							いての知識)				
# 2	SR(自己実現)					# 6	L(不特定の)				
SR	SR ₂ (専門的・職業的活					L	L(Ra) (達成, 競争, 成功,				
自	動での自己実現)						失敗などを含む)				
己						余	L(E)(文化, 教育, 芸術領				
現						暇	域のLでE領域を含む)				
						活	L(ph)(身体活動を主とす				
# 3	R(自己実現以外の実現)					動	るL)				
R	Ra(達成動機に関係したR)					費	L(ph, Ra)(競争を主とす				
実	R ₂ (職業活動全般)						L(ss)(感覚的娯楽追求活				
現	Rn(活動分野における否定						動)				
	的動機づけ)						L(gf)(運や賭事的なし)				
							L(gf, P)(金儲けを含む)				
							L(nR)(休憩, 休養など)				
# 4	C(他者との一般的接触)					# 7	P (不特定の)				
C	C ₂ (他者からの接触)		3		8	P	P(Sph)(身体的見かけをよ				
社	C ₃ (他者に対する接触)					所	くすること)				
会	Cn(接触の拒絶—攻撃性など)		5		32%	有	P(R ₂)(専門的・職業的生				
接						・	活に関すること)				
触						財	P(L)(娯楽に関する所有)				
						産	P(an) (動物)				
# 9 否定的要素 (副分類に使用)						# 8	T(超自然的対象, 不特定の)				
n (純粹の否定)						T	Tr(宗教, 死後の生活など)		1		2
np (肯定的願望の否定的表現)						超	Tx(哲学的確信, 実存的				
n+ (否定的ことがらに対する願望)						自	価値—人生の意義, 運命				
						然	自由, 真理など)		1		8%
							Tn(すべての価値の否定, 死)				
# 12 分類不能						計		100	25		
U(分類項目なし)											
U?											

ある。すなわち、重要度(I)が+2であり感情調(Af)が+2であることは、被験者の生きがいを感じ、重要度(I)が+2であり感情調(Af)が-2であることは、被験者の深刻な問題を感じていると言える。これらの重要な反応が過去、現在、未来のどの時間的次元にあるかを捉えることは、被験者の時間的展望の様態を把握する上で重要な意義がある。上記の視点からA子の反応を分析すると、25項目の反応のうち、19項目(76.0%)が重要反応項目に該当し、そのすべてが現在次元に属し、しかも、I=+2, Af=-2の反応であることが認められる。このことはA子が現在非常に深刻な問題をかかえていることを示している。それらの問題となる項目の概要は、死にたい(反応1), だらけてきた(反応5), 疲れやすく、緊張している(反応6), 人前で緊張し、動揺する(反応7), 気分がむらがある(反応8), 人とスムーズに話せない(反応9), 自分は面白くない子だ(反応11), 変った人としが付き合えない(反応12), 人から避けられている(反応13), 気違いになるのではないか(反応15), 生き方がわからない(反応16), つきつめやすい(反応17), 父母から理解されていない(反応18), 自分を成長させなければいけない(反応19), いつも緊張している(反応21), ぐずぐず、くよくよしており、成長しない(反応22), 考えを止める方法が分らない(反応23), 人前に出たくない(反応24), 他の人は何を話しているのか(反応25)という19項目である。以上の19の重要項目のうち11項目(57.9%)は「自己の性格特性の否定的表現, Scar(np)」であり、4項目(21.1%)は「社会的接触に関わる問題, C₂(Scar,np), C₂(np)」である。両項目を合わせると15項目(78.9%)が自己の性格および社会的接触上の問題で占められていると言える。他の4項目は「探求・認知, E」と「超自然, T」(自殺念慮, 生き方の問題)となっている。重要項目では、「自己, S」に関する問題の比重が大きい。

A子のT P Tに対する最初の反応内容は自殺(希死)念慮であるが、その背景には「自己の性格特性に関する否定的認知」と「対人関係の問題」があることが認められる。

表4. 時間的次元別重要反応の質的分析

	分 析 基 準	数	(反応番号) 内 容
未	重要度(+2)*感情(-2)*可能性(-・?)		
	(+2)*(-2)*(+)		
来	(+2)*(+2)*(-・?)		
	(+2)*(+2)*(+)		
現 在	重要度(+2)*(-2)*	19	(1)死にたい, (5)だらけてきた, (6)疲れやすく、緊張している, (7)人前で緊張し、動揺(8)気分がむら, (9)人とスムーズに話せない(11)自分は面白くない子だ, (12)変った人としが付き合えない, (13)人から避けられている(15)気違いになるのではないか, (16)生き方がわからない, (17)つきつめやすい, (18)父母から理解されていない, (19)自分を成長させなければいけない, (21)いつも緊張, (22)成長しない, (23)考えを止める方法が分らない, (24)人前に出たくない, (25)他の人は何を話しているのか。
	(+2)*(+2)		
過 去	重要度(+2)*(-2)		
	(+2)*(+2)		

3) 時間的展望以外の要素の分析

(1) 反応の簡潔性と明確度 (conciseness and clearness)

T P Tの実施に先立ってなされた教示では、「最近2週間位の間に考えたことや人に話したことを25項目挙げること」が要求されている。精神的健康度の高い被験者の場合には、この要求に対して「…ということ」というように、短い言葉で簡潔にまとめて列挙する形で、ほぼ25項目前後の項目を挙げるのが一般的である。しかし、A子の場合には、「…ということ」という表現は姿を消し、反応5以降は表現も冗長になり、反応12あたりからは一層その傾向が強くなっており、まとまりを欠いている。内容についてくわしく説明している点では明細ではあるが、簡潔かつ明確に表現する冷静さを欠いていると言える。反応数が25項目の枠をはるかに超えていることやT P T実施所要時間も1時間47分にも及んだのも、A子の精神状態の混乱を物語っていると言える。

(2) 対人関係ないしコミュニケーション (human relations and/or communication)

T P Tでは、時間的展望とは無関係であるが、臨床的資料を得るために対人関係ないしコミュニケーションの状況についても問うている。A子の場合には、反応数25項目中、思考レベル(Th)のものは11項目(44.0%)であり、14項目(56.0%)は他者に伝達(Co)されている。伝達対象数は延べ24人であるので、1項目につき1.7人に伝達していることになる。父母および同胞が13人(54.2%)、友人が8人(33.3%)および知人3人(12.5%)が伝達対象とされており、家族への依存傾向が強いことが認められる。実質の対象と回数を見ると、父と母がそれぞれ5回、姉が3回、友人のT子さんが5回、Y子さんが2回、Kさんが1回、下宿のおばちゃんが2回、その他の知人の女性が1回となっている。それらのうち父母と姉との接触は20日以上前のことであり、友人についてもほとんどが2週間の枠を超えており、当日にT子さんに話したのが1回あるだけである。その他は下宿のおばちゃんに話した1回だけが2週間以内の伝達に含まれるだけである。以上のことから、2週間以内の対人関係は非常に乏しいといえる。

3. 総合的解釈

1) A子の時間的展望テスト(T P T)成績からみた時間的展望

A子のT P Tへの反応数は47項目に及び、要求された25項目を22項目(88.0%)超過しているだけでなく、25項目分の反応段階および質問段階などに要した所要時間も1時間47分であり、精神的に問題を持たない被験者(45-60分程度)よりも大幅に超過していることは、テスト実施時のA子の精神状態に何らかの問題が秘められていることを物語るものである。その主な原因は、①反応段階での反応が簡潔さを欠き、冗長であること、②質問段階での説明においても簡潔さを欠いており、質問の趣旨を超えた内容にまで及んでいること、③情緒的に不安定であるため、反応段階において25項目程度を挙げるという課題を意識に留めることができず、心理的距離感を喪失してしまっていることによると言える。A子は、T P Tの質問段階において、しばしば大つぶの涙を浮かべ、鼻汁をすすりながら話し続けたことにも示されている。

A子の心にある時間は、何年たっても変化することのない現在である。その現在は、少なくとも小学生の高学年のころから、換言すれば、彼女が思春期を迎えたころから変ることなく持ち越された現在であり、遠い過去が種々な変化を経ながら現在へと持続してきたという感覚で捉えられる現在ではなく、遠い過去が、即現在であり、時間的経過にもかかわらず、過去=現在なのである。そうした現在は、過去から何らの変化もなく持続してきたものであるが故に未来でもあるということになる。彼女の時間的定位(O)は極度の現在指向型であるが、彼女の現在は境界のない過去と未来とを内包した、停滞した現在であると言える。

また、A子の停滞した現在、不快に満ちたものであり（不快指数は96.0%）、彼女にとって重要（重要度は100%）なものである。しかも、漠然と関わる未来が建設的ないし肯定的に進行する可能性は皆無（90.5%）に近い。彼女の関心事（反応内容）は、「自己」（S）、「社会的接触」（C）、「探求」（E）および「超自然」（T）に関する4領域にあり、特に、「自己」および「社会的接触」の2領域に制限されている（84.0%）。より具体的に言えば、「自己の性格特性についての否定的表現」（自己領域）と「他者との接触の回避ないし拒否」「接触困難」および「他者からの無理解」（社会的接触領域）という否定的な反応内容で占められていると言える。

2) T P T所見からみたA子の自殺的行動

A子はT P T実施前2カ月間に3回の自殺を企図しているが、彼女は、過去、現在、未来の時間的次元を一応のくぎりをもちながら、連続性をもったものとして建設的に認知するものではなく、くぎりのない現在に固着しており、未来展望をまったく欠いている。彼女の認知する「現在」は、極めて混乱した、不安定な、否定的な現在である。しかも、その現在は、同様な状態であった過去から持ち越されたものであり、なんらの変化や改善も予期できないまま未来へも持ち越されるにちがいない「現在」である（aPr-f 反応が多い）。彼女は「自己」変革・成長を希求しながらも、極度に「自己」を否定し、他者との「接触」を希求しながらも、極度に「社会的接触」を回避ないし拒否せざるを得ない状況に置かれている。彼女の一連の自殺的行動（希死念慮、自殺念慮、断絶念慮、自殺企図）は、過去から変化することなく持続してきた苦悩に満ちた「現在」の「未来」への持ち込み拒否であり、未来の断絶（cessation）を意図したものであると解釈される。

結 語

本報告は、対人接触の障害、情緒不安定および希死念慮などを訴えた女子大学生の第3回目の面接時に実施されたT P T（時間的展望テスト）成績に基づいて、彼女の自殺的行動（来談する前の2カ月間に3回の自殺未遂があり、たえず希死念慮をもつだけでなく、T P T実施後にも2回の自殺未遂が認められた）を時間的展望という視点に焦点を当てて考察しようとしたものである。

筆者らは、クライアント（あるいは患者）の心理状態を時間的展望という視点から迅速かつ的確に把握し、治療ないし援助指導の方針を摸索する緒をつかむ補助的手段としてT P Tを開発し、分裂病、神経症、うつ病患者などに実施してきた。たまたまT P Tを実施してあったクライアント（患者）の中には、T P T実施以前あるいは以後に自殺的行動（希死念慮、自殺念慮、自殺威嚇、自殺の素振りおよび自殺企図）の認められたケースもあった。本報告は3例目の報告である。

A子（21歳）のT P T所見によると、彼女の時間定位（指向性）は極度の現在指向型（100%）であった。しかも、彼女の現在は過去と不可分であり、過去から変化することなく持ち越されてきた否定的な現在であった。過去から何らの変化も改善もなく持ち越されてきた現在は、未来に対して何らの変化も改善も期待できない現在でもあった。彼女の一連の自殺的行動は、苦悩に満ちた否定的な現在の「未来」への持ち込み拒否であり、未来の断絶を意図したものであると解釈された。このことはBINSWANGERが、自殺したエレン・ウェストという女性の時間性について、「彼女の現存在は、過去によってより多く支配され、空虚な単なる現在に封じこめられていた。そのために、現存在からすべての将来への見通しが奪い取られていたのである」と指摘したことを支持するものであると言える。

自殺的行動（suicidal behavior）には、自殺（希死）念慮（suicidal ideation）、自殺威嚇（sui-

cidal threat), 自殺の素振り (suicidal gesture) および自殺企図 (suicidal attempt) などがあり, 自殺企図の結果は, 自殺未遂 (incompleted suicide または unsuccessful suicide) と自殺既遂 (completed suicide) に大別される. また, それらの自殺的行動の背後にある心理機制は一樣ではない. したがって, それらの自殺的行動の水準によっても時間的展望の相違が存在することが仮定される. 今後, さらに事例の考察を重ねることによって, 残された数多くの問題に接近して行くことにしたい.

〈付記〉本研究は, 日本教育心理学会第29回総会 (1987) における報告に加筆したものである.

文 献

- ビンスワンガー L. 新海安彦・宮本忠雄・木村 敏(訳) 1960 精神分裂病 みすず書房 (BINSWANGER, L. 1957 *Schizophrenie*. Pfullingen.)
- BROCKOPP, G. W., & LESTER, D. 1970 Time perception in suicidal and nonsuicidal individuals. *Crisis Intervention*, 2, 98-100.
- BROCKOPP, G. W., & LESTER, D. 1971 Time competence and suicidal history. *Psychological Report*, 28, 80.
- ESON, M. E., & GREENFELD, N. 1962 Lifespace : its contents and temporal dimensions. *Journal of Genetic Psychology*, 100, 113-128.
- 勝俣暎史・上田一博 1973 時間的展望テスト (T P T) に関する研究 (I) — T P T の構想と適用例 — 熊本大学教育学部紀要, 22, 人文科学, 155-162.
- 勝俣暎史 1974 時間的展望テスト (T P T) に関する研究 (II) — 破瓜型精神分裂病患者の T P T 解釈例 — 熊本大学教育学部紀要, 23, 人文科学, 195-206.
- 勝俣暎史・上田一博 1974 自殺未遂の一事例 — 時間的展望テスト (T P T) 資料の分析を中心として — 九州心理学会第2回大会発表資料, 1-3.
- 勝俣暎史 1978 自殺の論理 青年心理, 7, 65-71.
- 勝俣暎史 1980 自殺脅迫者の時間的展望テスト (T P T) 所見 九州心理学会第40回大会発表論文集, 9.
- NUTTIN, J. 1976 *Human motivation and time perspective : the Motivational Induction Method (M. I. M.) and the Motivational Inventory*. Unpublished manuscript, University of Leuven, Research Center for Motivation and Time Perspective, Leuven.
- SHNEIDMAN, E. S. (Ed.) 1976 *Suicidology : Contemporary Development*. New York : Grune & Stratton.
- YUFIT, R. I., BENZIES, B., FONTE, M. E., & FAWCETT, J. A. 1970 Time perspective and suicide potential. *Archives of General Psychiatry*, 23, 158-163.
- YUFIT, R. I., & BENZIES, B. 1973 Assessing suicidal potential by time perspective. *Life-Threatening Behavior*, 3(4), 270-282.